# 教育研究業績書

2024年05月20日

所属： 景観建築学科　　資格： 教授　　氏名： 石田　潤一郎

| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
|---|---|
| 建築史・都市史・文化財保存学 | 近代建築、京都、都市計画史、保存再生 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 工学博士,工学修士 | 京都大学大学院 工学研究科 建築学専攻 博士課程 満期退学 |

教育上の能力に関する事項

| 事項 | 年月日 | 概要 |
|---|---|---|
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1.担当するすべての講義科目でのハンドアウトの配布 | 2001年5月～現在 | 歴史系の科目は、因果関係の明確化と判断の材料となる資料の提示が重要である。担当科目では、講義内容を正確に理解させるために、要旨を配布している。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1.『クイズでわかる近代建築100の知識』（彰国社）の共編著 | 2012年10月 | 五十嵐太郎らとクイズ形式で近現代建築史の基礎知識を身につける書籍を編集し、20問を執筆した。 |
| 2.『近代建築史』（昭和堂）の共編著 | 1998年5月 | 中川理とともに西洋・日本を通観する近代建築史の教科書を編纂した。 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

職務上の実績に関する事項

| 事項 | 年月日 | 概要 |
|---|---|---|
| 1 資格、免許 | | |
| | | |
| 2 特許等 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 1 著書 | | | | |
| 1.村野藤吾によるリノベーションの作法 | 共 | 2021年5月 | 国書刊行会 | 第15回村野藤吾建築設計図展の図録を書籍化したもの。村野藤吾による改修・増築設計作品を紹介するもので、15作品を取り上げた。石田は赤坂離宮迎賓館を担当し、歴史洋式に則った宮殿建築②人間味を与えるための村野の手法を図面に即して分析した。 |
| 2.空想から科学へ | 共 | 2021年3月 | 思文閣出版 | 中川理の退職記念にまとめられた論文集。石田は「『京城』における幹線街路網建設―1930年代を中心に」を寄稿した。日本植民地期の「京城府」における幹線街路建設の経緯を明確にし、その計画理念を抽出した。京城が自立した地域群からなる近世的結節構造から、都市全体が機能を分担する近代的大圏構造へと変化する中で、街路建設の目的が捷径路の確保から拠点間の連結、幹線街路相互の連絡と変化する。その結果、1930年代末には放射線と環状線とが組み合わさる構造ができあがることを示した。中川理、空想から科学へ編集委員会、中野茂夫、中嶋節子、石田潤一郎ほか全28名。本人担当部分：pp.689-725。 |
| 3.京都大学建築学100年の歩み | 共 | 2021年3月 | 京都大学学術出版会 | 京都大学建築学教室の100周年を記念してその歴史をまとめた書物。前半は各時代を築いた16人の教授についての解説と現役教員の座談会、後半は資料編とする構成を取る。石田は創立委員を務めた教授、日比忠彦についてその業績と人物像を概観した。これまでの学説史と回想記をまとめるとともに、新聞記事など新史料を発掘して、早世のために知られることの少なかった日比忠彦の歴史的位置を明確にした。京都大学建築学教室創立100周年記念史出版編集委員会編、高橋康夫、石田潤一郎ほか全19名。本人担当部分：pp.2-11。 |
| 4.日本都市史・建築史事典 | 共 | 2018年11月 | 丸善 | 都市史学会の事業として編纂された先駆的事典。編集委員14名のひとりとして、「第4章近代」の立項と執筆者の選択、原稿の校閲を中 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| | | | | 川理と分担し、また「建築意匠の展開」「20世紀の装飾」を執筆した。さらに「付録2近代洋風建築の基礎知識」の立項と校閲、「軒廻り」「開口部」を執筆した。都市史学会編、編集委員：伊藤毅（編集委員長）、岩淵令治、石田潤一郎ほか全14名。本人担当部分：pp.310-311、328-329、622-627、631-635。 |
| 5.建築を見つめて、都市に見つめられて | 単 | 2018年4月 | 鹿島出版会 | 1980年代から2017年までに執筆したエッセイ、総説のうち、53編を収載した。近代建築史、現代建築批評、景観論など多分野にわたる思考の足跡をたどる。京都工芸繊維大学定年退職にあたり、中川理の編集に沿って刊行したもの。 |
| 6.近代日本の空間編成史 | 共 | 2017年5月 | 思文閣出版 | 中川理の監修のもとまとめられた論文集。近代都市空間に生じたさまざまな事象と、その基底をなしたインフラ、制度、心性などを解明しようとする。石田は金珠也（嶺南大学校講師）とともに「植民地期「京城」の工業都市化と都市計画」を執筆した。1930年代後半から「産業都市」をめざした京城府において工業地域を形成した永登浦、および仁川との中間地帯に造成が進められた京仁工業地帯について、その展開過程とそれを支えた都市計画制度を解明した。<br>共著者：中川理（監修）、砂本文彦、中野茂雄、木方十根、石田潤一郎・金珠也ほか全18名<br>本人担当部分：pp.279-322 |
| 7.村野藤吾とクライアント | 共 | 2017年4月 | 国書刊行会 | 第14回村野藤吾建築設計図展の図録を書籍化したもの。協力者の観点から村野作品を考える試みの一環で、最大のパトロンであった近鉄関連の作品15件を扱った。石田は総論「村野藤吾におけるパトロネージ――近鉄から見た」、および各論「あやめ池温泉場」「都ホテル」を担当した。<br>共著者：石田潤一郎、小谷川勝、福原和則ほか全11名<br>本人担当部分：pp.20-22、23-44。 |
| 8.近代日本建築家列伝 | 共 | 2017年1月 | 鹿島出版会 | 『INAX REPORT』（2012年から『LIXIL eye』に改称）に連載された「生き続ける建築」をもとにした近代期の建築家35人の評伝。石田は「武田五一　日常の中の建築家」「安井武雄　自由を求め続けた不羈の精神」を執筆した。<br>共著者：丸山雅子（監修）、鈴木博之、藤森照信、平井ゆか、浅羽英男、石田潤一郎ほか全30名<br>本人担当部分：pp.125-132、225-232。 |
| 9.写真集成・近代日本の建築第15巻～第19巻 | 共 | 2015年8月 | ゆまに書房 | 近代建築の写真集を復刻するシリーズの一環をなすもので、竹中工務店による自社施工作品の写真集5冊を対象とする。石田は全体の監修をおこなうとともに、第19巻において収載された建築物のうち重要な作品94件に解題を施した。また立地位置を示す地図の作成を指導した。<br>共著者:石田潤一郎、松隈章、松本始<br>本人担当部分：pp.25-73. |
| 10.村野藤吾の住宅デザイン | 共 | 2015年3月 | 国書刊行会 | 第13回の村野藤吾建築設計図展の図録を書籍化したもので、従来、重視されることが少なかった住宅作品を紹介する。石田は総論「ハウスドクターとしての村野藤吾」、および各論「親栄会住宅」を執筆した。共著者：石田潤一郎、三宅拓也、笠原一人ら全10名本人担当部分：pp.20-22、91-102 |
| 11.滋賀県庁舎本館 | 共 | 2014年10月 | サンライズ出版 | 1939年竣工の滋賀県庁舎本館が国登録文化財に登録されるにあたり、県文化財保護課課員の池野保氏とともにその建設経緯と文化財的価値を述べた書。特に意匠の特徴を詳述し、また設計者である佐藤功一と国枝博を中心に、建設に従事した人間像にも光を当てた。<br>共著者:石田潤一郎、池野保 |
| 12.関西のモダニズム建築 | 共 | 2014年6月 | 淡交社 | 1920年代から60年代にかけて関西に建てられたモダニズム建築50件を紹介する。石田は物件の選択、執筆者の決定など監修を務めたほか、「大阪朝日ビル」「大阪証券取引所市場館」など6件を担当し、序論を執筆した。<br>共著者：石田潤一郎、川島智生、笠原一人、中川理ら17名<br>本人担当部分：pp.6-13、16-22、89-102、86-193、205-211、244-250 |
| 13.Constructing the | 共 | 2014年3月 | ASHGATE | 黒石いずみ氏監修による論文集。石田は2008年の米国建築史学会で |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| Colonized Land: Entwined Perspectives of East Asia Around WWII | | | | 発表した論文“Colonial modernity of urban space――through the land readjustment project in 1930s of Seoul”に金珠也氏とともに補訂を加えた“Colonial modernity and urban space: Seoul and the 1930s land readjustment project”を執筆した。共著者：西澤泰彦、Cole Roskam、Xu Subin、青井哲人、Chao-Ching Fu、Paula Morais、石田潤一郎・金珠也、禹東善、黒石いずみ<br>本人担当部分：pp.171-192 。 |
| 14.クイズでわかる近代建築100の知識 | 共 | 2012年2月 | 彰国社 | 建築史の知識をクイズ形式で伝達しようとする新機軸の書物。日本近代のうち、明治大正期を中止に20問を出題し、その解説及びミニクイズの作成をおこなった。<br>共著者：五十嵐太郎、石田潤一郎、久保田稔男、佐久間雄基、米山勇、脇坂圭一<br>本人担当部分：pp.113-118、129-138、143-144、147-148、157-160、167-170、175-176、179-180､185-186、191-192、209-212 |
| 15.近代建築史 | 共 | 1998年5月 | 昭和堂 | 産業革命期から今日に至るまでのモダニズム建築の歩みを叙述した通史。編者として全体の構成、執筆者の選択にあたるとともに、3つの章の執筆にたずさわった。第2章「日本における近代建築の受容」では1～6節において明治期の日本における西洋建築の導入過程を述べた。第9章「近代建築運動の拡がり」では1・4～7節において近代建築運動の国際的展開について、北欧とイタリアを除く地域を担当した。第10章「歴史様式とアール・デコ」では歴史様式あるいは装飾性が二十世紀においてどのように延命したかについて述べた。編者：石田潤一郎、中川理、共著者：中嶋節子、石田潤一郎、中川理、小林正子、本田昌昭、梅宮弘光、末包伸吾、千代章一郎、川島洋一、田中禎彦、笠原一人本人担当部分：pp.14～23、136～138、143～150、152～165。 |
| 16.関西の近代建築 | 単 | 1996年11月 | 中央公論美術出版 | 近代の洋風建築が、関西において、どのように受容され、どのような地域的特性を獲得したかを、主要な建築家56人の事績を明らかにするなかで物語った。 |
| 17.都道府県庁舎――その建築史的考察 | 単 | 1993年2月 | 思文閣出版 | 学位論文『近代日本の府県庁舎に関する史的研究』を基礎として、明治維新以降、現代にいたる都道府県庁舎の建築的様態を明らかにし、その社会的背景を詳述した。第1・2・3章では、一次史料によって明治前期におけるほぼすべての建設事例を解明し、その知見をもとに庁舎の時代的特質と営繕制度の変遷を明らかにした。第4章では明治後期における定型の成立過程を、第5章では大正・昭和戦前期のオフィスビル化の過程を明確にした。第6章では戦後を扱い、現代的庁舎像の様相を叙述した。科研費研究成果公開促進費による出版。 |
| 18.都道府県庁舎――その建築史的考察 | 単 | 1993年2月 | 思文閣出版 | 学位論文『近代日本の府県庁舎に関する史的研究』を基礎として、明治維新以降、現代にいたる都道府県庁舎の建築的様態を明らかにし、その社会的背景を詳述した。第1・2・3章では、一次史料によって明治前期におけるほぼすべての建設事例を解明し、その知見をもとに庁舎の時代的特質と営繕制度の変遷を明らかにした。第4章では明治後期における定型の成立過程を、第5章では大正・昭和戦前期のオフィスビル化の過程を明確にした。第6章では戦後を扱い、現代的庁舎像の様相を叙述した。科研費研究成果公開促進費による出版。 |
| 19.スレートと金属屋根 | 単 | 1992年7月 | INAX出版 | 日本の近代洋風建築の屋根について論じた書物。第1章・第2章では、代表的な屋根葺材である天然スレートについて材料の発見・使用の経緯と最初期の作例についての従来の説を整理して、私見を述べ、ついで、明治期のスレート屋根葺き技法を仕様書、修理工事等によって明らかにした。第3章では、金属板葺きについて、銅・亜鉛・鉛・鉄板など材料別に欧米での技法を整理し、日本での作例と技術の展開とを解明した。 |
| 20.物語ものの建築史－屋根のはなし | 単 | 1990年4月 | 鹿島出版会 | 日本建築の屋根について概説し、建築史上の疑問点と現代的課題についても触れた書物。第1章では屋根に関わる用語の解説とともに原始住居の屋根について研究の最先端を紹介した。第2章では屋根架構の変遷についての先行研究を建築全体の歴史との関連の中で整理した。第3章では茅葺きの技術体系を聞き取りをもとに再構成した。第4章では各種屋根葺材の技術と意匠について研究成果を整理し、かつ |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 21.日本の建築[明治大正昭和] 第７巻－ブルジョワジーの装飾－ | 単 | 1980年1月 | 三省堂 | 未解決の問題について仮説を提示した。監修者山田幸一。<br>戦前期最大の設計事務所であった曽禰中條建築事務所と横河工務所、および所長の曽禰達蔵、中條精一郎、横河民輔について、その履歴と活動を精査し、あいまいであった作品歴を確定した。その上で代表的な作品で採られた設計手法を分析し、意匠の時代的特質を明らかにした。特に歴史様式が解体していく過程を、意匠の具体的分析と設計者の建築観の両面から分析し、1910～20年代において建築の理想像が希薄になる状況を叙述した。 |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1.近代日本の府県庁舎に関する建築史的研究 | 単 | 1987年5月 | | 明治維新以降、現代にいたる都道府県庁舎の建築的様態を明らかにし、その社会的背景を詳述した。第１・２・３章では、一次史料によって明治前期におけるほぼすべての建設事例を解明し、その知見をもとに庁舎の時代的特質と営繕制度の変遷を明らかにした。第４章では明治後期における定型の成立過程を、補章では大正・昭和戦前期のオフィスビル化の過程を明確にした。 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1.A study on park planning in Kyoungseong in 1940’s; focusing on the function for air defense in wartime | 共 | 2015年11月 | Proceeding of International Conference on East Asian Architecture Culture 2015 | 植民期の京城に造成された公園に関する研究の一環として、戦時期における防空施設と公園の関係を明らかにした論文。内容は2つに分けられ、一つは朝鮮王朝由来の社稷壇において1940年から43年にかけ、防火水槽の設置と防空指導訓練場が設けられたことを論じた。二つ目には高射砲陣地が散策用の「保健広場」名目で京城府周辺域の高地に1940年から44年にかけて多数設置されたことを明らかにした。<br>共著者:Ahn Sangmin ,Ishida Jun’ichiro |
| 2.Littele architecture:The role of early-modern models in the international recognition of japanese architecture | 共 | 2015年11月 | Proceeding of International Conference on East Asian Architecture Culture 2015 | 幕末から明治期にかけて多くの日本建築の模型が欧米に渡った。特に万国博覧会では巨大で精巧な模型が制作されて出展されている。ここではウィーン万博時に制作され、ウィーン世界博物館に所蔵される大名屋敷模型（1873年）とこれに触発されて同一の制作者に発注されたミュンヘン五大陸博物館所蔵の大名屋敷模型（1891）の分析を中心に、それらが形態についての情報を伝えるにとどまらず、屋根架構など技術的情報も示すべく、いわば「小さな建築」として制作されていたことを論じた。<br>共著者:Gergely Peter Barna, Shigeatsu Shimizu, Junichiro Ishida |
| 3.日帝期ソウルの児童公園（小公園）計画及び韓国解放後の変遷に関する一考察（原文韓国語） | 共 | 2014年3月 | ソウル市立大学付設ソウル学研究所、ソウル学研究第54号 | 1930年代以降の市街地計画公園計画において、児童公園が特に重視されていたことを指摘し、日本国内とほぼ同基準で設計されたことを示した。<br>朝鮮戦争による混乱と戦後の人口激増とによって、市街地計画公園の様相は大きく変化する。この点について1962年「都市計画法」制定、およびそれに基づく1965年「ソウル市公園再整備計画」立案に至るまでの状況を行政資料と実地踏査、ヒアリングによって明らかにし、近隣公園は私有地比率が高く、大面積であったために転用される割合が高かったが、児童公園はよく維持されたことを示した。<br>共著者：安箱敏、石田潤一郎 |
| 4.明治後期から昭和初期における職工寄宿舎に関する評価:－宇野利右衛門の著述に基づく労働者居住施設の歴史的考察　その１－ | 共 | 2013年7月 | 日本建築学会計画系論文集 78(689) | 明治後期から昭和初期にかけて、日本の労働問題に携わっていた宇野利右衛門（1875―1934）の活動に注目し、宇野と彼が設立した工業教育会の著述に基づいて労働者居住施設の歴史的考察を行った。「その1」では、宇野利右衛門と工業教育会の活動における、労働者居住施設に関する著述の全体像を明らかにし、これを踏まえて、職工寄宿舎についての著述の内容を分析した。宇野らが寄宿舎には限界を見て社宅制度を評価しつつも、現実的にはなくすことのできない寄宿舎の改善の方針として小規模単位の生活を推奨し、また居住施設とその他の福利施設とを一体的に整備することを求めたことを示した。共著者：平井直樹、石田潤一郎、池上重康 |
| 5.名都「京城」の夢―「京城市街地計画」の植民地的特質に関する考察― | 単 | 2013年3月 | [京都大学人文科学研究所]人文学報 104号 | 1936年以降京城府当局が施行した「京城市街地計画」について、その理念と立案過程、技術者の陣容を明らかにし、特質を考察したもの。諸事業のなかでも土地区画整理事業は特に京城府が主体的に遂行した。そこでは、石川栄耀による「名都京城」という評価に後押しされて、制度面では日本国内では不可能だった総合的な都市計画 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 3 学術論文 | | | | |
| | | | | を実現しうる体制を構築し、具体的な手法では曲線街路や近隣住区理論の導入が進められたことを跡づけた。しかしその総合性と先進性は地域的特性の軽視と表裏をなしていたことを指摘した。 |
| 6.明治後期から昭和初期における職工社宅改善の試み:－宇野利右衛門の著述に基づく労働者居住施設の歴史的考察　その２－ | 共 | 2013年1月 | 日本建築学会計画系論文集78(692) | 明治後期から昭和初期にかけて、日本の労働問題に携わっていた宇野利右衛門（1875―1934）の活動に注目し、宇野と彼が設立した工業教育会の著述に基づいて労働者居住施設の歴史的考察を行った。「その2」では、宇野利右衛門らの言説において、労働者の居住施設のなかでの「社宅」がどう捉えられているかを示したうえで、職工社宅の様態に関する著述の内容、工業教育会が開催した懸賞設計のあり方を検討し、懸賞設計が宇野らの手を離れて毛織工場や公営住宅向きのものとして実現したことを明らかにした。<br>共著者：平井直樹，池上重康，中江研，石田潤一郎 |
| 7.立面の検討過程から見る松寿荘の特質について－松寿荘における村野藤吾の設計過程に関する研究その２－ | 共 | 2013年1月 | 日本建築学会計画系論文集78（692） | 村野藤吾晩年の作品である松寿荘（1979）の設計図面342点を分析し、各図の制作時期や案の変遷を明らかにした。また、制作時期が連続する図面間において認められる変更箇所を抽出することで、この作品の設計において力点が置かれた部分を明らかにし、あわせて、施主の出光興産所蔵資料、施工者の鹿島建設の工事記録を精査した。外観の設計図14案の変更過程を追い、特に屋根の表現の目的を明確にした。また平面の微妙な変化が屋根の各部分形状の変化を呼び起こし、それがさらに隣接する部分同士にも分節や分離といった変形を生む過程を確認できた。共著者:角田暁治，福原和則，石田潤一郎 |
| 8.The Roles of City Planning in the Industrialization of Seoul during the Colonial Period | 共 | 2012年12月 | Proceedings of EAAC2112 | 1930年代朝鮮半島では、北部の新興工業都市の成立と並行して、既存の大都市においても近代工業の育成が叫ばれた。大都市の行政者は、都市域内に工業地区を設定・造成し、基盤施設を整備して積極的に大工場を誘致しはじめる。本論文は、消費都市としての傾向が強かった在来都市を「生産都市」「産業都市」化する上で、都市計画・都市整備事業はどのような意味を持ったのかを探ろうとするものである。そこでは在来都市の典型である「京城」に注目して、この「首都」が朝鮮半島南半では最大の工業都市に転換する変化を導き支えた都市計画の役割を解明し、工業化がいかに空間化されたかを考察した。<br>共著者：Ishida Jun'ichiro、Kim Jooya |
| 9.平面の検討過程から見る松寿荘の特質について | 共 | 2012年9月 | 日本建築学会計画系論文集77巻679号 | 村野藤吾の晩年の大作、松寿荘の空間構成の特質を京都工芸千大学所蔵の設計図でのエスキスの検討過程からさぐった。複雑な機能を処理することに腐心する一方、意匠上では空間の境界線、すなわち公室と私室の境、あるいは室内と庭園との境界線を曖昧にし、重層させる操作に眼目があったことを指摘した。<br>共著者：角田暁治、福原和則、石田潤一郎 |
| 10.1903年第五回内国勧業博覧会台湾館の設置経緯について | 共 | 2010年2月 | 日本建築学会計画系論文集第75巻第648号 | 第5回内国勧業博覧会には日本最初の植民地たる台湾のパヴィリオンが設置された。その際新築ではなく、伝統的な台湾家屋で、北白川宮能久親王病没の地である篤慶堂が移築された。論文ではこの措置が決定するまでの経緯を台湾総督府行政文書と新聞史料とに基づいて解明した。当初は台湾風の大建築を新築する計画だったが、予算難からパヴィリオン建設自体取りやめることになる。台湾のゆかりのある政財界人の協力と農商務省の補助とで計画が復活し、伝統家屋遺構の移築という方法で最終決定を見るたものである。<br>共著者：松下迪生、石田潤一郎 |
| 11.近現代韓国における郊外住宅地の変容 | 共 | 2008年3月 | 住宅総合研究財団研究論文集第34号 | 1930年代以降，韓国の郊外住宅地がいかにして形成され，どのように変容してきたかをソウルと大邱の土地区画整理事業地について探った論考。「京城府」による10地区，「大邱府」による2地区について，その具体的な計画内容を把握し，そこでの日本人都市計画技術者の理念を解明した。これまであいまいであった戦時中の施行進捗状況を明確にするとともに，戦後の変容を調査した。その上で，「京城府」西郊の大峴地区を詳細に調査し，日本人による「外庭・低建蔽率」イメージに基づく計画が，戦中・戦後の韓国都市の状況と齟齬を来たしていく過程を明確にした。<br>共著者：石田潤一郎、金珠也、中川理、北尾靖雅 |
| 12.『県庁建坪規則』施 | 単 | 1985年9月 | 建築史学第5号 | 廃藩置県以降、明治9年までに建設・計画された21件の府県庁舎の様 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 行下の府県庁舎について―明治最初期の府県庁舎に関する史的研究(下) | | | | 態を一次史料に基づいて詳述している。そのうえで明治4年11月に施行された「県庁建坪規則」がどのような規定力を持ち、この厳格な規定が廃藩置県後の地方行政の急激な変化のために現実といかなる乖離を生じていったかを明らかにした。そして8・9年の特異な平面形が府県側の「規則」の読み替えに起因することを指摘した。 |
| 13.廃藩置県以前の府藩県庁舎について―明治最初期の府県庁舎に関する史的研究（上） | 単 | 1985年3月 | 建築史学第4号 | 明治維新以降、明治４年の廃藩置県までの府藩県三治期における地方行政庁舎について詳細に論じている。まず、中央政府による庁舎営繕活動への規制が、当初の地方官の裁量に委ねていた当初の姿勢から中央集権国家体制の整備と並行して厳格化し、「県庁建坪規則」へ集約されていく過程を明確にした。ついで兵庫・登米・久美浜の３県庁舎の具体的様態を明らかにし、執務空間の拡大に代官所・奉行所からの変化を指摘した。 |
| その他 | | | | |
| １．学会ゲストスピーカー | | | | |
| 1.Japanese colonial city planning in the modern era | 単 | 2010年9月 | Procrrdings of the CU:ADS 2010 | タイ・チュラロンコン大学主催の建築・デザインシンポジウムでの基調講演論文。日本が第二次世界大戦において敗北する以前に有していた海外の植民地のうち、台湾の台北市と朝鮮の京城府における都市計画を概観する。台北の場合、既成市街地の交通網整備と環境改善、郊外開発のコントロールという近代都市計画の二大課題を双方ともに解決することができた。その理由として、「城内」は公共用地が多く、かつ清代の施設は躊躇なく撤去できたこと、既存集落の民家が接道型であり、新街路を開削しても生活空間の構造が維持できたこと、1920年代を除いて、事業費が比較的潤沢であったこと――が挙げた。一方、京城市街地計画では土地区画整理事業を街路計画、公園計画・用途地域制と連動して運用することが可能であった。しかし、都市計画が総合的で堅牢な構造を有していればいるだけ、両都市においては習俗や歴史的蓄積といった前近代的要素は排除され、きしみを生じがちであった。植民地における支配－被支配の構造の中で、近代都市計画の強権性が暴力的に作用する局面があったことを指摘した。 |
| ２．学会発表 | | | | |
| | | | | |
| ３．総説 | | | | |
| | | | | |
| ４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| | | | | |
| ５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 1.真宗本廟（東本願寺）内事建築群総合調査報告書 | 共 | 2020年10月 | 真宗大谷派（東本願寺） | 東本願寺内事は宗主およびその家族の居住空間とこれに給仕する寺務組織の執務空間からなる。現在の内事建築群は主に1923年に武田五一の設計により建設されたもので、洋館と和館を組み合わせ、延べ約2000坪に及ぶ大邸宅である。この建築の文化財指定を図る前段階として、建設経緯に関わる歴史調査と現況調査、実測図作成、文化財的価値の解明を薦めた報告書を作成した。石田は全体を統括したほか、現況と保存状況、洋館部分の技法・意匠上の特色、文化財的価値について報告した。共著者：石田潤一郎、松田剛佐、三宅拓也。本人担当分：pp.14～21、32～114、143～147、213～214 |
| 2.旧三井銀行小樽支店建造物調査報告書 | 共 | 2020年6月 | 公益財団法人似鳥文化財団 | 小樽市色内通りに所在する旧三井銀行小樽支店は1927年に曽禰中條建築事務所の設計で1927年に竣工した建築である。重要文化財指定を図る準備として建設経緯、現状の様態、設計者、施工者、技法、意匠などについて叙述し、文化財的価値を明確にする報告書を作成した。石田は設計者・施工者、銀行建築の系譜での位置付け、文化財的価値について報告した。共著者：宗本順三、小出祐子、石田潤一郎ほか全6名。本人担当部分：pp.71～78、94～99、104～105 |
| 3.奈良ホテル（本館）文化財的価値の調査報告書 | 単 | 2019年2月 | 西日本旅客鉄道株式会社近畿統括本部企画課・JR西日本コンサルタンツ株式会社 | 奈良ホテルは1909年（明治42）に新築開業した全国有数のクラシックホテルである。将来の文化財指定に備えるため、建設経緯と文化財的価値を明らかにする報告書を作成した。社史等においても曖昧であった建設経緯と設計者・監理者について新聞史料を博捜して解明を進めた。辰野片岡建築事務所の設計をほぼ確定するとともに、鉄道国有化に伴う所有者の変化によって監理者が同事務所から河合 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| ５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| | | | | 浩蔵へ変わったことを指摘した。 |
| 4.京都市の近代化遺産――近代建築編 | 共 | 2006年6月 | 京都史文化市民局文化財保護課 | 京都市による近代化遺産調査報告書第2巻。概説としては事務所・ビル、大学施設、個別解説では金融機関、高等教育施設、文化施設の69件を担当した。共著者：石川祐一、石田潤一郎、大場修、中川理、三宅宏司、藤沢彰、岸泰子、登谷正宏、細谷豪、松田法子、高橋清香、矢ヶ崎善太郎<br>本人担当部分：pp.29～33、35～37、40～42、125-160、163-166、172-173 |
| 5.京都市の近代化遺産――産業遺産編 | 共 | 2005年7月 | 京都史文化市民局文化財保護課 | 京都市による近代化遺産調査の報告書の第1巻。土木構築物と産業施設を中心に官公庁舎も含む。電力施設と生産施設、行政庁舎を担当し、20件の個別解説と行政施設の概説を執筆した。共著者：石川祐一、川上貢、松村博、三宅宏司、石田潤一郎、大場修、藤沢彰、田中尚人、登谷正宏、細谷豪本人担当部分：pp.50～55、84～96、113～131、147～156、160 |
| 6.大阪証券取引所旧市場館歴史調査報告書 | 共 | 2004年3月 | 大阪証券取引所（市場館）開発・保存方策検討研究会 | 1935年に建設され、2002年に解体された大阪証券取引所旧市場館の記録保存を目的として刊行されたもので、意匠史、都市史、構造学、工法など多方面から旧市場館を分析する論考を集め、また取り壊し前の写真と原設計図の主要な部分を収載した。石田は全体の編集を行なったほか、建設経緯の項を執筆し、また掲載原設計図の選択と解題を担当した。執筆担当部分では、大阪証券(株式)取引所の組織とその施設の沿革を述べた上で、旧市場館の建設過程を多くの資料を集約して詳述した。<br>共著者：石田潤一郎、西澤英和、吉田鋼市、山形政昭、中川理、西堀正樹<br>本人担当部分34～41頁 |
| 7.滋賀県の近代化遺産――滋賀県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書 | 共 | 2000年3月 | 滋賀県教育委員会事務局 | 日本の近代化にあたって建設・設置された多くの建築物・土木構築物・産業施設は,今日滅失の危機にある。滋賀県では平成10・11年度に県下に所在するそれら近代化遺産の総合調査を行なったが、そこで調査委員会委員長を務めて、調査方針のとりまとめにあたったほか、２次調査物件の選定、２次調査の分担、51件の物件の解説、種別概説執筆にあたった。<br>共著者：石田潤一郎、神吉和夫、筒井正夫、三宅宏司、村上康蔵。<br>本人担当部分、49頁ほか54カ所。 |
| ６．研究費の取得状況 | | | | |
| 1.近代日本の博覧会における建築展示に関する研究 | 共 | 2013年～2017年 | 科学研究費補助金（基盤Ａ） | 研究代表者。近代日本が博覧会という機会にどのように建築を展示してきたかという面から、日本建築文化の発信と、諸外国での受容のされ方の様相を探った研究。まず成果としては、ヨーロッパ各国に現存する日本建築模型を主に現地調査によって所在を確認し、320点のデータベースを構築した。その中で最大規模のウィーン世界博物館所蔵の大名屋敷模型については徹底的な実測と文献調査をおこなってその制作過程と特徴を解明した。また1910年にロンドンで開催された日英博覧会での建築模型・装置56種を明確化し、さらに展覧会閉会後の帰趨を解明して、出展者の模型についての認識を示した。 |
| 2.日本統治期朝鮮半島における在来都市の産業都市化に関する研究 | 共 | 2010年～2012年 | 科学研究費補助金（基盤Ｂ） | 研究代表者。朝鮮において近世以前に形成された都市である京城府・大邱府などは消費都市の傾向が強かったが、1930年代後半に入ると市域内に工業用地を設定・造成し、基板施設を整備して積極的に大企業を誘致しはじめる。この「産業都市化」を誘導した都市計画の役割を検証し、工業化がどのように空間化されたかを解明した。 |
| 3.1930年代京城府の都市改造 | 共 | 2007年 | 平和中島財団アジア地域重点学術研究助成 | 研究代表者。1930年代に日本統治下の京城府（現・ソウル）で進められた法定都市計画「京城市街地計画」の諸事業について検討を加えたもの。街路網の開削、住宅地開発、風致地区・公園地区・緑地地域の指定が遂行された。ほぼ同時期に同室の都市改造が進められた京都市と比較して、並行性と同時に植民地的特徴も見られることを指摘した。 |
| 4.一次史料に基づく1930年代朝鮮半島における土地区画整理 | 共 | 2007年 | 大林都市研究振興財団研究助成 | 研究代表者。2006年に国家記録院所蔵文書の公開が一層進み、また韓国語新聞のデジタル化が進捗したことを受けて、従来史料としてきた計画者側の文書だけでなく、府会議事録や土地買収記録、新聞 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| ６．研究費の取得状況 | | | | |
| 事業･住宅地経営事業の再検討 | | | | 記事から得られる「計画される側」の動向を明らかにした研究。 |
| 5.旧村野藤吾所蔵資料を用いた村野藤吾の建築についての総合的研究 | 共 | 2005年～2008年 | 科学研究費補助金（基盤Ｂ） | 研究代表者。京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する村野藤吾の設計図書の分析を通して、村野藤吾の手法を解明し、またその作品の現代的意義を考察した。年次ごとに2005年「村野藤吾と公共建築」、2006年「文化遺産としての村野作品」、2007年「晩年の境地」、2008年「アンビルト・ムラノ」というテーマを設定して分析を加えた。 |
| 6.近現代韓国における郊外住宅地の変容 | 共 | 2005年 | 住宅総合研究財団研究助成 | 研究代表者。ソウルと大邱において日本統治期に施行された土地区画整理事業の様態を解明し、それたの地区が戦後どう変容したかを検証した研究。韓国国家記録院所蔵文書を史料として、太平洋戦争終結までに着工に至ったソウルの10地区、大邱の2地区について分析した。 |
| 7.ソウル市の都市環境に積層された近代化空間の研究 | 共 | 2003年～2004年 | 鹿島学術振興財団研究助成 | 研究代表者。韓国ソウル市において、植民地期に日本人居住地域だった本町・明治町かいわい、及び日本人都市計画技術者によって街路開削と宅地造成が遂行された西郊の大峴地区を対象に、形成過程を解明するとともに、その空間特性をスペース・シンタックスを用いて分析した。 |
| 8.近代日本の郊外住宅地に関する研究 | 単 | 1988年 | 科学研究費補助金（奨励Ａ） | 従来から研究が蓄積している東京・阪神間に比して注目されていなかった京都市域の郊外住宅地開発を中心に、開発主体と計画内容、現状の把握を進めた。実業家による借家経営、土地会社による大規模分譲、高野川改修による河川敷の宅地化など特徴的な類型を抽出できた。 |
| 9.近代日本の行政建築に関する史的研究 | 単 | 1982年 | 竹中育英会建築研究助成 | 行政庁舎の近代的展開、特に府県庁舎の成立から定型の成立に至る過程を国立公文書館所蔵資料をはじめとする一次史料に基づいて考察した。庁舎の様態の変化と、中央政府による営繕統制と建設費補助の制度の改廃の両面から解明を進めたもの。 |

| 学会及び社会における活動等 | |
|---|---|
| 年月日 | 事項 |
| 1.2020年4月～現在 | 日本建築学会学会賞文化賞選考委員 |
| 2.2016年4月～現在 | 滋賀県文化財保護審議会委員 |
| 3.2013年4月～現在 | 文化庁文化財審議会第二専門調査会委員（2019年4月から会長） |
| 4.2011年4月～現在 | 京都市文化財保護審議会委員 |
| 5.2002年4月～現在 | 大津市文化財専門委員 |
| 6.1998年4月～現在 | 京都府大山崎町文化財保護審議会委員 |